

PCによる英語作文の授業、支部活動の思い出など

樋口隆士

私が JACET の支部会員になったのは、1990 年の夏の頃でした。3 月までの職場(札幌北高校長)を定年で辞め、縁があって國學院女子短大(現國學院短大)の教壇に立つことになったのがきっかけでした。当時健在であった友人の棚橋先生(道工大)の勧めもあり、北大の浪田先生に照会して、入会の手続きをしたことを覚えています。そんなわけで本学会の一年生となりましたが、年 2 回の支部の研究会に参加することで、教授上の示唆を受け、学会の当面する課題と方向に目が開かれました。歴代の支部長さんを始め、何人かの会員の方々とご厚誼を頂きました。2000 年 3 月で第 2 の定年となり、その後 1 年が経過、別にしたいことが出てきましたので、思い切って退会することにしました。

入会の頃、担当の教科の中に **English Composition**(英語作文法)がありました。1 クラス 55 人の学生は、90 分の授業には終わりまで集中できない状況でした。教授法で悩んでいた折、小樽女子短大(現小樽短大)で研究会があり、情報処理室での英作文の授業を参観する機会に恵まれました。そこでは学生が各自 PC に向かい、夢中になって課題に取り組んでいるのを目の当たりにしました。

同じ科目の授業ながら、学生の態度に天地の差があるのに驚き、指導教官の宮町誠一先生(現札幌学院大)に教授上の要点をお聞きしました。早速、使用教材ソフトについて、米国の販売店へ必要な枚数のフロッピーディスクを注文しました。勤務校の情報教室と同じ機種(NEC PC9801DA)の PC を購入し、マニュアルと首っ丈で取り組みました。3 ヶ月後の 92 年度から、PC による授業を始めて 11 年、試行錯誤を繰り返しながら現在に至っています。我が家の PC も 4 代目で、性能の向上は隔世の感があります。受講の学生も変わり、現在 1 クラス 30 人の授業で PC は初めてというのが、3 年前までは大多数でしたが、昨年あたりから数人と逆転しました。PC は、利用ソフトの多様化と飛躍的な改善に伴い、教授に止まらず、学科の運営、その他の公的な仕事のほかに、私的な活動にも広範囲に利用、なくてはならないものとなっています。ご教示いただいた宮町先生には、誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

授業では、エッセイ作成を目標とします。学生は各自興味のあるトピックを選び、関連の記事をインターネットで検索します。トピックや記事を選んだ理由を導入部とし、記事の要約が続き、終りに読後感を加えるよう指導します。引用のサイトを必ず付記させます。添削にはメールを使い、何度か書き直しを

させます。添削指導は、ほとんど家庭の書斎から行います。引用のサイトでオリジナルな記事を読むと、私にとっても新しい発見があり、個々の学生の興味や関心を共有することができます。出来上がったエッセイは、まとめて印刷し、配本します。自分や仲間の英文による作品集を手にしたときの学生の喜びは大きいものです。これは、最後の授業でのアンケートにも示されています。語法や語彙、文章構成の添削は骨の折れる作業ですが、これによって報われます。

以上のほかに、テキストによる各種状況の文章例の作成、各単元の練習問題解答の提出が課題となります。提出ごとに解答を与え、模範例による自己添削の上、再提出させます。学期ごとに到達目標は設定しますが、各学生の、英語基礎能力とPCの習熟度によって、進度は自由とし、最終的には、全員がすべての課を終了するように配慮します。この課題の提出は、平常点となり、単位取得の最低条件です。能力があり、かつ、熱心な者は早く課題を仕上げ、上記のエッセイに多くの時間をかけます。その成果によって上位の成績評価が得られるので、相当の努力をします。エッセイへ進めない者も出ますが、それはそれでよしといたします。

PCによる英作文の指導といっても、学生と個別に面談し、指導することは欠かせません。巡回指導も必要です、学生は、学習上の悩みやトラブルスポットを先生に知ってもらいたい、その上で適切な指導を受けることを願っているのです。それで、授業ごとに、学生の近況などを先生へのメッセージとしてメールや文書(用紙)に短く書かせることにしています。教師が学生をできるだけトータルに理解し、適切な励ましを与えることによって、学習の効果が上がるのは経験的に明らかです。ちょうど、病気を治すためには、医師が病人をよく知り、温かい言葉をかけるようなものです。「手術は成功したが、患者は死んだ」では不幸な患者は浮かばれません。

学生同士の助言を奨励します。PC操作、ソフトの活用について、気の合った学生が隣り合って座り、互いに教え合います。メールで作品を交換し、簡単なコメントをつけるように指導しますと、さらに学習意欲が沸きます。教師にはCCで同文が送られるので、学習グループと学習の経過がわかります。この方法は、PCの設備、少人数の担当学生、教師の時間的な余裕といった条件が必要ですが、学生のPC所有が当然となると教室や時間割は絶対的なものではなくなります。教師は、経験豊かな退職後の非常勤講師に頼むのが一番でしょう。研究と講義、会議、出張といった本業のほかにも、外部団体、委員会の出席や他校の講師まで抱え込んだ多忙な専任教員は、時間の余裕がないのが現実です。

少子時代、18歳人口の長期減少期における大学の英語教育は、いわゆる二極化が進行し、両極の一方では、学生数の確保と共に、全入状況の中での効果的な授業の工夫が求められます。そこでは、特に、学習の目的を自覚し、興味関

心を高めるモチベーションの喚起によって、自発的な学習の継続を助けると共に、学生個々に応じた達成可能な小目標を設定し、その成功感を喜びに代える個別的な指導が不可欠となりましょう。PCによる自学学習と教師の助言・指導との併用による学習は、それをある程度保障するものです。情報社会における英語運用能力の習得を望む学生ないし社会の強い要請に応えられなければ、大学も退場を余儀なくされることでしょう。北海道を代表する有力企業の相次ぐ破綻失敗は、時代の読み違いによるものとされ、よそ事とは思われません。

さて、会員在籍中の支部活動の思い出としては、91年度、北大を会場として第30回記念全国大会が成功裡に行われ、市民にも開放したシンポジウムが好評であったこと、94年度末、朴南植教授(ソール大学)の特別講演とシンポジウム、AILA '99 Tokyo を控え来札された小池生夫会長の大会協力要請への熱情あふれる挨拶、99年度、旭川での大会が強く印象に残っています。残念なのは、共に監査を勤めた友人の棚橋啓一君が退職後間もなく亡くなったことでした。JACET 北海道支部、先学の会員諸兄姉には、大変お世話になりました。世の中は Give and Take といいますが、支部には役員として監査業務を94年度から3期6回勤めたくらいで、講演や研究発表、支部ニューズレター等、まさに恩恵を頂くだけの関係でした。定年退職後の叙勲(00年度)に当たっては、講演の機会を与えられ、発表のあとに花束をいただくなど、お礼の言葉もありません。最後に、支部の充実発展と会員の皆様のご健勝、ご活躍を心より祈念いたします。有難うございました。